

条件も大方有利である。では、林業の停滞は、一体、何に起因するのであろうか。

この問題を、歴史的、あるいはまた、林業の生産構造の面から探ってみると、それらは、直接的には、蓄積量の減少の結果として捉えられる。更には、林業生産の構造上の問題、としても捉えることができる。しかし、この問題を、調査地域の林業のみに限定せず、全体的に — 昭和30年代に始まる急速な人口流出や、他産業との関係で — 捉え返してみると、これは、地域のみの個別的な問題ではないと思われる。

調査地域は、愛知県の後進地域といわれる北設楽郡の中においても、自然環境的に、一層の悪条件におかれており、これが歴史的条件の媒介を通じ、先の問題とからみ合い、一層肥大化して現象しているのだ、ということができるとと思われる。

このような捉え返しの下に、対象地域を改めてみるならば、そこで営まれている、人々の生活、それは一見近代化され、進歩、発展したかみえるが、根底には依然多くの問題が未解決のまま存在しているようである。

山形県上山盆地の地域性

— 農業を中心として —

三 浦 千代子

調査地域である山形県上山盆地は、山形盆地と米沢盆地の間にあり、東北日本の内陸盆地列の中で最小規模のものである。蔵王火山の泥流によって山形盆地と分断されているが、上市市と山形市との間は約10kmで交通の便もよい。卒論では主に農業の面から地域性を探ってみた。

調査地域においては、自然条件が農業に及ぼす影響が特に大きいといえる。降水量が少ないこと（年間1162mm 1961～70までの平均）、盆地を流れる蔵王川、宮川が酸性毒水河川であり、この河川水を灌漑に用いているということは、稲の生産量を低下させ、生産費、労働の面でも多くの負担がかかる。藩政時代から農民は水不足ととりくんできた。

盆地北部久保手地区と南西部西郷地区には溜池が多く存在する。宮城県を流れている横川から分水する横川堰は、藩政時代に農民側から計画されたもので明治時代になって完成した。真水供給という意味で現在でもその役割は甚大である。

無害水河川である葛涌川に、灌漑水供給を目的としたダムが1972年に建設された。一年のうちでも3・4・5月に降水の少ないことは稲作にとっては不利な条件であるが、ぶどう、桜桃などの果樹栽培にはむしろ必要な条件である。山形県の果樹栽培の中心地は天童、東根、寒河江地区と赤湯地区であるが、上山ではこれらの果樹栽培地の影響を受けてきた。現在ぶどうと桜桃の伸びが著しく、特にぶどうは山の斜面を切開いて栽培されている。このほかりんご、洋なし、柿と果樹の種類は多い。柿は生柿として出荷されるものと干柿として出荷されるものがある。

盆地内の関根表区で作られていた「関根柿」は、江戸時代から特産物となっていて、現在でも京浜方面へ出荷している。当地域の柿だけでは足りず、県内の他地域から柿をもってきて農家が加工している。柿の取引商人が上山市内に40人ほどいる。

調査地域の農業形態は多角経営であり、その種類は、山形県内の他の地域に比べても多いといえる。果樹のほかに江戸時代からの伝統産業である養蚕、そして県内でも中心的な位置にある酪農がみられる。養蚕は果樹や野菜栽培に転換できないようなところで特に盛んである。

酪農は乳業会社の立地と深く関係し、乳業会社（明治乳業）がこの地域の酪農に果たした役割は大きい。しかし調査地域の酪農は規模が小さく、一戸当りの飼養頭数は約2頭であり、周辺地域に比べると非常に少ない。

ところで農作物の収入の面からいえば、稲による収入が圧倒的であり、果樹、酪農、養蚕、野菜、工芸作物は、稲作と複合した形で存在する。養蚕、酪農、果樹の中心地帯は山麓部に分布し、盆地床は水稻が卓越している。そして山麓にむかって複合形態がすすむ。

調査地域の農業集落はそのほとんどが市街地から1時間以内のところにあり、山形市にも近いということは兼業農家の増加と結びついている。上山市において、1960年から1970年までの10年間で第2種兼業農家戸数は約2倍になっている。また、近くに働き口があるということは、冬期の出稼ぎ者を少なくしている。